

## 「聖人のご誕生に学ぶ」

中央仏教学院長 北 島 晃 融



初夏のさわやかな光りの中で、あらわゆるものの生命の芽生えの時節であり、時あたかも親鸞聖人の降誕をお慶びする時節でもあります。

子供の頃、釈尊の花まつりには、芽生えはじめた草花を摘み、花御堂を飾りたて、誕生仏に甘茶を灌ぎ、分けてもらった甘茶を喜んで飲んだことでしたが、教育生のみなさんにもこのような楽しい思い出をお持ちの方が多くはないでしょうか。この生命の芽生えの時節に、あらためて釈尊の、聖人のご誕生の意味と教えの原点をたずねたいものです。

さて、もともと日本では、特に仏教の歴史においては、誕生を祝うということはあまりなかったといわれています。降誕会も本山内の一行事として行われていましたが、明治20年に御影堂で特別の法要をいとなんでから、一般寺院でも行われるようになったといわれています。確かに、老病死という苦悩の真只中にあるいのちをどう全うしていくかというところに仏教の基本がある、つまり涅槃に目標をおくのが仏教であることからすると誕生を祝うという考え方はあまり出てこなかったこともうなずけます。しかし、「いかにあるか、いかにあるべきか」と私の生命を、そしてこの社会をあきらかにしていくのが仏教であることを考えると、この世に生まれたことをどう受け止めるかは、大変重要なことだと思えます。

釈尊誕生時の「天上天下唯我独尊 三界皆苦我当安之」（四方七歩の宣言）は、真理をさとる仏陀としての宣言であると同時に、すべての生命の誕生は、六道という迷いを超えて仏に成っていく出発であり、かけがえない独り立ちの生命の尊さにめざめる歩みであることをも教示している宣言でありましょう。しかもその尊い生命に目覚めることなく、我他彼此という自我中心の生き方をしている私に、はかりない智慧と慈悲のはたらきである本願にめざめる、いのちの尊さを教えてくださったのが親鸞聖人ですから、釈尊・聖人のご誕生をお慶びするということは、とりもなおさず、私たち一人ひとりが、この世に生まれてきたことをどう受け止め、このいのちをどういかしていく人間になるかが問われる日である、ということでもあります。

さて親鸞聖人は「正信偈」の中で、

如来所以興出世 唯説弥陀本願界 五濁悪時群生海 應信如来如實言  
(教主世尊は弥陀仏の 誓い説かんと生まれたもう にごりの世にし  
まどうもの 教えのまこと信ずべし)

とうたわれているように、釈尊がこの世に誕生された目的は、ただひとえに凡愚である私が仏に成る道、それは阿弥陀如来のご本願をとかれるためである、と教示されております。

私は両親を縁としてこの世に生命をたまわり、世間でいういわゆる還暦という年まで歩ませていただきました。そんな私が最近いつも聞かせてもらっているのが「50にして49の非を知る」という言葉です。人生50年といわれた時代に、50才になってようやく今までの49年間の歩みの間違いに目覚めた人の言葉でしょう。しかし現実の私はどうでしょうか。60才になっても「あの時なぜあんなことを」などと過去の過ちに私の歩みが立ち止まるものが多々あります。しかもその後悔は、日々の生活も手につかなくなるような状態さえうみだすことがあります。今は生活させてもらっていますが「年金生活は、病気は」などと未来の不安にとらわれると、足がすくんで生活に熱が入らぬこともあります。日々の行動に自信がゆらぐと、周りの人の顔色、人の声などが気になったりもします。こんな悲しい生き方しか出来ぬ私に、釈尊は次のように語ってくれています。

過去を追わざれ 未来を願わざれ

過去はすでに去り 未来はいまだきたらず

ただ現在の法をその場その場に観察し

動揺することなく よく知って修習せよ

『賢善一夜の偈』

と語り、そして最後に遺言として、

すべての事象は移り変わる 汝 怠ることなく努力せよ

『遺誠』

と教示されたといわれています。

つまり、過去や未来にとらわれやすい私、常に歩みが止まりがちになる私が、止まらずに、今の今を一步一步歩みつづけることが出来るのは、「にごりの世にしまどうもの」である私の人生そのものを引き受けるぞと私のために現れてくださった阿弥陀如来と一緒に歩んでくださるからです。安危を共同してくださるお蔭によって、自分のできることを精一杯、力の限り歩ませてもらえる人生にめぐまれるのです。つまり、釈尊そして親鸞聖人の降誕があったからこそ 阿弥陀如来のご本願をいただくことができた私でした。

親鸞聖人の5月20日・21日の降誕会を縁として、いただいていたいのちの深い意味を考えたいものです。

(仏教担当)